

TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

新教育の実践家たち：東京滝野川尋常高等小学校長
山崎菊次郎

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川下, 新次郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/133

研究ノート

新教育の実践家たち
東京滝野川尋常高等小学校長 山崎菊次郎

川下 新次郎*

New Educationist, Kikujiro Yamazaki

Shinjiro Kawashita*

New Education, educational reform movement in Taisyo period, which pushed on with a drastic changeover from teacher-centered or text-centered education to child-centered education, must be counted among the most important events of the history of Japanese education. And it have had not a little effect on the revision in the system. For example, child-centered curriculum and emphasis on daily life experience in the first Course of Study in 1947, life environmental studies of the first and second grades in primary schools in that in 1989 and so on.

This paper studies on New Educationist, Kikujiro Yamazaki, principal of the Takinogawa Ordinary and Higher Primary School (Tokyo). He put integrated curriculum according to pupils' life into practice, and emphasized the importance of learning based on their needs and interests, which consisted of independent study, discussion and presentation.

Key words : New Education, Integrated curriculum, Independent and cooperative study

はじめに

わが国は、明治5年(1872)の学制を契機として、近代国民教育制度を確立することになるのだが、それは、“学制序文”の「一般人民華士族農工商及婦女子必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん」の文言に示されているように、教育の機会均等を目標とした。他方、その教育目的は明治新政府下での早急な国民意識の形成をめざすものであった。したがってそこでは、個々の子ども達の成長・発達よりも、“教化”に重点が置かれていた。すなわち、教育内容は検定あるいは国定の教科書によって規定され、教育方法は一斉授業による注入主義に重点が置かれた。ほぼ同時期に公教育制度の基礎作りをスタートさせた欧米先進諸国においても、事情は同様であった。こうした状況に対し、心ある教育者達は、子どもの固有の存在に注目したルソー、ペスタロッチなどの思想家に学びながら、その革新に努めた。わが国でも、たとえば、明治初期、ペスタロッチの教育思想をア

* Division of International and Interdisciplinary Studies, Tokyo University of Fisheries, Konan 4-chome, Minato-ku, Tokyo 108-8477, Japan (東京水産大学共通講座).

アメリカで学んだ東京師範学校長高嶺秀夫の影響下で生れた開発主義教育がある。これは、教師、児童間の具体的事実を媒介とする問答により児童の自発性の開発をめざすもので、教師の説明・講義中心の授業に比べ、生徒の創意・関心が刺激され、自主的精神が喚起されることをねらいとした。しかし、こうした試みは、近代教育をスタートさせて間もない教育現場にあって、その思想的意義が充分理解されないまま、教育方法のみが形式化されていった。

やがて、“教化”的近代教育の普及につれて、その問題点も自覚化、共有されるようになり、19世紀末から20世紀初頭にかけて世界的に新教育運動が展開される。わが国でも、“大正デモクラシー”の状況下、私立の新学校として沢柳政太郎の成城小学校(大正6年)、羽仁もと子の自由学園(大正10年)、野口援太郎の池袋児童の村小学校(大正13年)などが設立され、また公(官)立学校において新教育を試行したものとして、木下竹次の奈良女子高等師範学校附属小学校、手塚岸衛の千葉師範学校附属小学校、北沢種一の東京女子高等師範学校附属小学校などが登場する。これらは、既存の学校の内部改革よりは、新しい学校を創設したり、あるいは附属校といった本々実験校的な性格をもった学校での試行であり、根本的な改革を行いうるが、その校数は限られていた。

しかしやがて、一般公立校においても新教育の実践がみられるようになる。本稿で注目する滝野川尋常高等小学校(昭和7年まで北豊島郡滝野川町、7年から東京市滝野川区)もそうした学校の一つである。論者はすでに同校での新教育の主に実践面について考察した。(注1)そこで本稿では、こうした実践の背景にある教育理念について、滝小新教育の中心人物であった校長山崎菊次郎(大正3年から昭和12年在職)に焦点をあて、考察したいと思う。“大正新教育”は、現代にいたるその後のわが国の教育のありかたに対して、さまざまなレベルにおいて影響力を有してきた。たとえば、戦後初期の「新教育」、近年の「生活科」、「総合学習の時間」の設置などにその関係を見ることができるといえる。その意味でわが国の教育改革の重要な指標の一つとなってきた。しかし、それは、他国における新教育運動がそうであったように、必ずしも一義的に把握されえない多様な性格をもっている。本稿がこの教育の一面の理解につながればと思う。

1. 山崎菊次郎の教育者としての経歴

教育者としての経歴については、山崎自身が、昭和10年(1935)に発表した「私の自叙伝」(『新教育研究』第5巻第1号)および「私の学校経営」(『教育論叢』第34巻第1号)のなかでふれている。

明治16年(1883)埼玉に生れた山崎は、明治39年(1906)「日露戦勝に、国を挙げて陶酔している真只中に」青山師範学校を出て、教員生活のスタートを切っている。それから、板橋小学校で訓導3年、主席訓導3年後、田端第一小学校長となる。そして大正3年に、滝野川尋常高等小学校長に就任した。当時の教育は、「挙げて、軍国日本の示標下に行はれ」て、師範教育も「兵营的色彩にぬりつづがされて」いた。さらに、そこで準備された教

新教育の実践家たち

員の「心の武装」が、「眼のくらむ様な規律と服従」下での教育を生み出していた。こうした状況に対し、児童の側から教育を考えようとした山崎は「急激なる進歩的改革主義者」として、不平分子の反感をかい、「薄暮帰宅するときは、必ず人力車にのり、精巧なるコルトを内ポケットに忍ばせる」事もあった。こうした職員の「改造」に5年を要した。

滝野川小学校で山崎が指導した新教育の歴史は、同校の「昭和二十年度国民学校教育奨励費申請書」における校歴大要によってみると、つぎのようになる。

- 大正 12 年 新教育の基盤を児童の健康と師弟との強き愛情に求め之を競技に表現し新レコード数種を作り、優勝旗の永久確保十数本に及ぶ。
- 大正 13 年 芸術教育特に学校劇を研究し、之を公開す。チャーナリズムの注視を浴びて(注2)江木文相より弾圧さる。(注3)
- 大正 14 年 新教育の入門の手ほどきに、国語、算術指導に主力を指向す。毎週研究授業を行い高師から訓導を招き座談会を開く。系統的新教育研究の第一歩をふみ出す。
- 大正 15 年 第一回全校公開教授を行ふ。「日本新教育協会」を同志と共に創設(注4)、実践運動を展開す。毎月機関紙を発行す。
- 昭和 2 年 画期的なる合科学習、総合学習を実施す。男女共学を六年迄実施し学級経営に新生面を開く。奈良女高師に指導を仰ぎ友校と提携、新教育の実践に専念す。
- 昭和 3 年 高二委員を議長とし、各学年選出委員数十名による学校自治会を開き反省と創意を求む。
- 昭和 5 年 機関紙「日本新教育」友紙「新教育」紙上に、教育記録を掲載する傍ら十指に余る街頭の教育、文芸雑誌に、殆んど、本校職員の掲載せられざるなき迄に各科にわたりチャーナリズムへの進出、全盛期を醸成す。職員著述者二に及ぶ。
- 昭和 6 年 大陸に事変勃発して国粹運動起り自由主義的教育の歩み漸く重きを加ふ。
- 昭和 8 年 新教育が真教育なる所以は、蓋し新教育なるに非ずして、教育本然の姿に立ちて、飽く迄真理なるが故に真理なりとの信念に燃えて合科学習を再検討し研究に拍車を加ふ。
- 昭和 9 年 低学年の合科学習、中高学年の総合学習の研究、漸く実を結ぶ。
- 昭和 10 年 生活指導に立つ教育と日本主義教育の嵐の中に、過去十年、十回に亘る全校公開教授に終止符をうつ。
- 昭和 13 年 教育の全一性に立ち各学年の総合教育の実践につき屢、父兄に発表会を行ふ。
- 昭和 16 年 協会を解散し、会員を脱退し、自由主義的教育の発展的解消を断行す。国民学校制実施に緊張して待機す。

これを見ると、山崎の新教育は、いわばその準備過程として、体育および情操教育（学校劇）からスタートしている。その理由を彼は次のように説明している。「当時数年にわたる戦禍（筆者注；第一次世界大戦）から、漸く抜け出て、青空を眺めて深々と息づきをした時、世界の人々の頭の中は、全く木枯の吹き荒ぶ、索莫寂寥たる広野に等しき感情の枯渇であつた。そこに思ひ出したやうに、情操教育、芸術教育が、叫ばれ出したのは当然とは言へ、意味深い警鐘でもあつた。そこで私は、指導陶冶の一方法として、芸術教育を拉してきた。特に、学校劇による、これの顕現に注目したのである。しかしながら、これのみに満足せず、いみじき情操の持主は、また剛健なる体の持主でなくてはならぬ。蒼白き体から生れる、病的な線と声を、私は恐れたのである。」（注5）

教練的な体育に対して、表現手段としての身体とその教育への着眼は独創的であるが、やがてこれらの教育の学習指導過程に注目するようになり、後の新教育、「合科・総合学習」へと発展していくことになる。

2. 山崎菊次郎と新教育

それでは、山崎がめざした新しい教育とはどのようなものであったのか。

彼は、大正末期から昭和初期にかけての自校での実践を総括する形で、昭和10年（1935）に『新総合教育の実践』（文教書院）を著している。以下、主にこの著書によりながら、彼の新教育観の特色を明らかにしていきたい。

2 - 1. 新教育の目的

山崎は教育の営みを、「個人の心身の存続発展」と「国家社会の物質的・文化的繁栄」という両面において重要なものとしてとらえた上で、従来の教育を前者に重点を置いたものとしてとらえている。すなわち、「児童個人をして、明らかに国家社会の一成員とはしながらも、これを個々の、集合体として観た個人本位の立場を強調し、個人完成の陶冶に主眼を置いた」ものであった。そして、この完成された個人を成員とする国家や社会は、健全なる発達を期待することができる、と考えていた。しかし、山崎は、この考えを否定する。「国家社会の構成員相互の関係は、素より単なる個人の集合でない以上、教育があくまで個人的立場を強調することは、やがてかかる教育の目的観が相即せざる理由となる・・・教育に於て認める個人は、同時に社会的成員としての個人、社会的個人であつて、その相互関係は、協同相互的でなければならない。」（注6）こうして、山崎の新教育のねらいは、旧来の個人主義的教育の立場によって、「個人的人格」の育成をはかるものではなく、成員相互の「社会的人格」の陶冶を目的とするものとなる。

前述したように新教育は、多様な側面をもっていた。たとえば、新教育運動が国際的、組織的に展開される契機となった国際新教育連盟（1921年創設）の発足綱領は、次のような主張からなっていた。青少年の精神力の解放と伸長、個性の尊重、興味の重視、生活活動によるその充足、自治活動の重視、社会的協力の強調、男女の平等と共学、人権尊重と

新教育の実践家たち

国際協力の強調。この中には、個性の尊重と社会的協力の強調という一見すると相反するような要素も含まれている。しかし他方で、多くの新教育の実践には、共通点がある。それは、「児童から」あるいは児童中心主義という言葉で表現されるように、子どもの興味およびそれに基づく活動の重視である。それが個性の育成をめざすのか、あるいは社会的協力の強調（社会性の陶冶）に向かうのか、ここに多様性の一つの軸があるように思われる。山崎の場合も、次の指導原理・教育方針にみられるように、この共通性を重視しながら、当時の「個人的人格」偏重の教育状況の中で、その目標として、後者を選択したということになる。

2 - 2 . 新教育の指導原理

こうした目的に立つ新教育は、どのような指導の下に実現されるであろうか。彼は、社会構成員の相互関係が具体的に表現される場として児童の生活に注目する。その生活の指導原理として次の5点をあげている。(注7)

自発創造の原理

児童の生活行為は彼等の生命の現れであり、それは自発に基くものである。言い換えれば、自発性は、生命の性質を如実に外部に示すものであり、能動的態度を構成する第一の素因として注目される。この自発性を教育的に誘導することで、新たな成長過程すなわち創造的発展の過程につながっていく。

環境関連の原理

ここで環境とは「生命体の発達に影響し、交渉あらしめる外圍一切の事象」である。生命体は、環境からの刺激に対し、能動的に反応するが、特に人間の反応は、選択性を有し、また自発的に刺激を求め、少くとも、この交渉を円滑にし順応しようとするものである。しかもこの順応は、環境創造、環境構成という創造的意味を有する積極性を含んでいる。故に、児童の教育にあつては、環境を整理し、より高い生活を構成するようにしなければならない。

興味欲求の原理

興味とは「生活地位を移行せしめる対象」である。この地位の移行は「発生的であり、欲求的であり、能動的」である。これらはいずれも発展を構成する要素となる。児童の学習にあつてはこの興味の対象が、生活を価値づけるものでなくてはならない。

社会共存の原理

個人の生活様式の基本をなす衣食住、言語、思想、行為等すべてにわたって、社会的協調の前に制約されている。児童の社会は、現代社会からのあらゆるものを児童的に解釈し、摂取し、呼吸し、成人社会との関係下に、更に新しき成人社会を構成しようとするものである。

身体自育の原理

かつてロックは「健全なる精神は健全な身体に宿る」、心身一如の健全性を教育上力説し、身体練磨を重視した。しかしこの練磨をいかなる立場、方法によって行うか議論の余

地がある。まず、個人的身体事情に合致すること、それから、教師の指導計画も大切だが、児童自らが体育への関心を高めることが重要である。

自発性あるいは興味への注目は、先の新教育連盟の綱領にも採りあげられているように、他の新教育においても広く見られるものであるが、ここでは、「教育的に誘導」「より高い生活」「生活を価値づけるもの」「更に新しき成人社会」といった表現にみられるように、教師の側の指導性にも配慮されている。また、環境への注目は、教室あるいは学校での生活に限定されない児童の生活全体の重視が、また社会共存の原理は「社会的人格」陶冶を教育目的としたことが、それぞれ関係している。最後の「身体自育の原理」は、訓練または児童の作業活動の重視から間接的な形で注目されることはあるが、直接身体の自発的教育に触れるものは少ないように思われる。これには、前述した山崎の新教育の歴史の中での、体育への注意が関係しているものと思われる。

2 - 3 . 教育方針

こうした指導原理に基づいた具体的実践の方向を示すものとして、以下の教育方針が示されている。(注8)

児童を中心として学習を進めること。
環境の整理をなし、生活に即した学習をさせること。
個別的取扱を関係の立場において重んじること。
自発的創作的に学習を指導すること。
過程を尊重して、内面的活動を価値あらしめること。
心理的順序を本体として論理的順序に進むこと。
自律的の生活をなさしめ、自律的態度を養うこと。
協同学習をなさしむることに依りて、社会的人格を養うこと。
あらゆる生活を透して国民的自覚を得しむること。
生活を体育化して強健なる身体を養う。

これら教育方針は、先の指導原理とほぼ対応するものとなっている。すなわち、
、
、
、
は「自発創造」「興味欲求」の原理と、
は「環境相関」の原理と、
は「社会共存」の原理と、
は「身体自育」の原理とそれぞれ関係づけられる。
はその具体的項目として、個性の観察をよくすること、類型性的に見た個性を考慮すること、社会的家庭的境遇を考慮すること、能力的差異を考慮すること、心身の異常児には特に留意すること、以上の見地より教材進度等につき相当の考慮を払うこと、
があげられており、自発性、興味の背景(制約)に注目した個別的対応の重要性を説いている。また、
は、指導者は常に題材に対して、国家的国定的見地より見ることがを忘れない、祝祭日、記念日等には、その所以を明らかにし、敬神・崇祖・愛国の精神を養う、国家、社会、国交等に関する時局問題は、時々学習問題に移して国民的批判力を養う、国旗掲揚を行い、国民精神の

新教育の実践家たち

涵養に資する、ことが具体項目としてあげられ、社会的協調の国家的枠組を示すものとなっている。

こうした教育目的、指導原理、教育方針に基づいて行われた新教育が、合科学習および総合学習である。以下、それぞれの教育に対する山崎の考えをみてみよう。

3. 合科学習

3 - 1. 合科学習の意義

山崎は、教育を、教育される者、教育する者、教材三者の交流と融合ととらえ、そこで教材の選択と学習活動に、教育者の理想と被教育者の生活欲求および生活現実の交流を最大、最深にすることを求めた。これは、旧教育に対する山崎の次のような見方からきたものである。旧教育が「牙城を追われ魅力を失ふた」のは、余りに非現実的、非生活的であり過ぎたから、言い換えると、教育者のみの「一方的意識の抽出」と「冷たい概念の露出」であって、被教育者の具体意識と生活現実を無視し過ぎたためであった。教師は子どもの世界を黙殺して、大人本位の仮想世界に当てはめようとしていた。これらは、教師中心、注入と受動、画一と模倣、強制と盲従、抽象と概念等の教育事実として現れ、児童は教師の傀儡の観すら呈している、と。(注9)新教育は、これらの欠陥への対策として提起されたことになる。従って、現実主義的で、生活主義的で、教育されるものの生活意識に根ざし、具体的生活に立脚しようとした。その児童の生活は、山崎からみると、「単一的で、分化以前の状態」にあり、生活対象に対しては、直感的で、具体を喜び、観念よりも生活すること、表現することを喜びものとしてとらえられた。こうして非分科すなわち合科教育が新教育として選択される。しかも、形式的に教師の側から与えられた合科学習では、児童の生活の核心にふれにくいいため、自由学習、独自学習が合科学習に先行する必要をとく。形式上には、児童の連続的な「生」の流れを尊重しなければならないし、内容的には、題材の非分化統合を重視しなければならない。ここでは、従来のような時間割は不合理なものにとらえられ、そこで尋常科3年までの教科別の時間割が撤廃されることになる。

こうした学習法に対し、当時の教育がめざした国民精神の陶冶が困難であるという批判があがるが、これに対して山崎は、児童の生活環境は、「活社会」の「活題材」に注意をむけさせるもので、これこそが合科学習の題材となることになる、教科書の教育こそ、社会の「活題目」から遊離していて、合科学習こそ国民教育の核心にふれるものである、と反論している。また、画期的な教育の革新であっただけに、身辺の抵抗も大きかった。「上司に対する法規上の手続、父兄への了解、環境費の問題、合科教育の真意義を解しない一般の人達の真只中であって、合科教育を地で行こうとすることは、それが公立学校であればあるほど、校長及び職員の命をかけての問題であった。」(注10)しかしこれに対しても、「鉄板の如き山崎校長の強固な意志と、職員の絶えまなき研究によって、一日一日実践が重ねられて行った。」個々の教員のおかれた状況について、昭和6年に滝野川小学校

川下 新次郎

に赴任してから訓導および校長として通算 30 年勤続した加藤八左衛門（明治 42 年生れ、昭和 6 年～ 28 年訓導、36 年～ 44 年校長）は、同校創立 80 周年記念誌の中で、当時の合科学習を次のように回想している。「題材の選定は、主として児童の生活経験を中心とし、遠足、運動会などの学校行事はもちろん、社会行事も採りあげました。そして、教科書や参考書は、この題材に関連した部分だけが必要に応じて活用されます。従って、児童にとっては、極めて興味のある学習が、自発的に楽しく与えられることになり、発表力の著しい伸長が認められましたが、教師側の準備や指導は、大変な苦勞でした。児童の生活や経験が、必ずしもその発達段階に応じた形で学習面に展開されるとは限りません。そこを、どう調整するかが、悩みのたねでもあったわけです。」（注 11）

3 - 2 . 合科学習の実際

ここでは、昭和 9 年に行われた新井つね（明治 19 年生れ、代用教員大正 5 年～ 6 年、訓導大正 6 年～昭和 15 年在職）による尋常科 1 年の合科学習をみてみよう。（注 12）

- 一．題材 歳末大売出し
- 二．目的 歳末大売出しの題材によって歳末における町の雑踏の有様、一年間の総括りや社会の動き、経済界の有様等を会得させて勤儉貯蓄の徳を養い、一方諸種表現学習に発展させて歳末における社会の活動を知らせ、さらに売物やごっこにまで進展して、数量的生活を体験させる。
- 三．時間および区分予定 一週間
- 四．環境整理
歳末における町の見学
ピラ、該当広告、福引等の広告宣伝の有様の観察
商品値段調査
- 五．方法
第一日 学習題材の協議と実地の研究
学習題材を協議し、「大売出し」とする
町の「景気」を見に行く
見学後の独自学習により扱うべき問題を協議する
出された問題への答えを各自の宿題とする
第二日 題目を中心として共同学習
宿題の問題について討議 不確かな用語について随時指導
第三日 （学習題材の表現活動）
大売出しの有様を絵、文、歌等で表現する
第四日 売屋ゴッコの発展
売屋ゴッコに必要なもの（品物、お金等）を作製する
値段調べや産地調べ等を宿題とする
第五日 売屋ゴッコの実演

新教育の実践家たち

宿題の結果から値段表、産地表を作成する

売買上の注意事項を協議し、掲示する

売買の結果を板書する 計算の指導

第六日 (売屋ゴッコの実演)

各役割(売り手、買い手、チンドンヤ等)を交代する

この学習を指導者新井は、次のように意義づけている。「この動く社会の観察学習を通して、更に発表(文章、絵、手工)表現の学習に発展して学習は一段と整理され、観察した社会を知識として再認識いたしました。扨て此の認識の上になつた子供は勢ひ、大人の歳末売出しを自分達もしやうとして、売屋ゴッコへの発展も自然でありました。観察して得た事、知識として整理された問題は今や自ら動く学習として再表現する事になりました。」ここには、独自学習 共同学習 学習成果の表現 発表会(“自ら動く学習”)という山崎の合科・総合学習の典型的過程をみることができる。

4. 総合学習

4 - 1. 総合学習の意義

児童の心理的成長、生活態度の発展のため、合科学習は尋常科3年までとし、4年以上は通常の分科学習を行っている。しかし、山崎にとり合科学習の必要は低学年にとどまらない。なぜなら、彼は従来の分科学習に次のような問題意識を抱いていたからである。それは、余りに文化修得の態度や方法を一方的に偏らせることがある、すなわち、余りに分析的、局部的、末梢的に陥る傾向がある。実は一つの事物あるいは事象であるにもかかわらず、あるときは理科的部面のみをまた或る時は地理、国史等として、その一局部のみを吟味し検討する。こうしてこれらの研究は、大きく統一される機会もなく、ばらばらのまま散在する。これは現代文化の欠陥であり、特に分科教育の大きな欠陥でもある、と。(注13)したがって、合科学習は高学年においても必要とされるが、重点は分科のほうに置かれるようになるため、この高学年での学習を合科学習と区別して、総合学習と呼んで、毎週水曜日第1限を「総合学習時間」として特設している。この両者の相違を彼は次のように説明している。後者は分科を認識しての総合であり、前者が遊びの生活として営まれ、遊びの善導 生活の発展拡充 としての学習であるのに対し、後者は学習意識が濃厚となり、真の意味の自主学習、目的的学习、自覚的学習となる。合科・総合学習は、このような教科的学習への意識の違いはあるにせよ、児童の自主性の尊重という点では、共通しているが、これについて山崎は、従来の、また「はいまわる教育」といった戦後の新教育への批判のように、この後にもみられる児童中心的な学習の「一般的通弊」にも注意を喚起している。すなわち、「例えハッキリした目的がなくとも、児童の自発的創作的学習があれば、学習を継続すべきである。こうした学習は失敗に終るかも知れない。しかし、失敗の体験が児童にとっては最もよき教育である。」といった盲目的な学習を「百貨店式ナンセンス」と批判し、教師の指導方針となり、児童には学習の反省、批判の基準となる目的

の必要を強調する。(注 14) この点は、前に指摘した指導原理における教師の指導性への配慮にもみられたものである。

4 - 2 . 総合学習の実際

ここでは、尋常科 4 年担当の飯田国男(明治 35 年生れ、代用教員大正 13 年、訓導大正 14 年～昭和 13 年在職)によって昭和 10 年に行われ、同年の雑誌『新教育研究』に発表された、総合学習「吾等の水道」の実践報告の概要をとりあげたい。(注 15)

一 . 学習目的

東京市の水道について学習することにより、都市における文化的施設としての水道を理解し、あわせて郷土「東京市」に対する認識を深める機縁としたい。

また、学級の全員が各自に何等かの研究及び労作を担当し、かつ提供し合うことによって、総合的に学習を構成し、全体的な了解の把握に到達し得るのであるから、これより協同精神の陶冶、社会的な生活の訓練を求め得ることと思う。

二 . 取材

題材の選択は学級成員たる児童の協議によるものであって、日常生活よりの着眼を主とし、本学年においては特に郷土の理解を深める角度から取材する様に心掛けた。

本題材も「東京中央郵便局」「東京青果市場」「山口貯水池への遠足」「荒川放水路への歩行練習」等の既習題材と共に、上の様な見地に立つものであるけれども、「王子製紙工場参観」「新聞」等の題材の様に文化的な素材としての意義をも十分に認めなければならない。

三 . 学習の梗概

- 1 . 便利な水道 生活環境の観察から出発する。都市における生活はこの水道施設によって、如何に恵まれているかを考察する。
- 2 . 昔の水道 東京市水道発達の過程を知ることにより現在の水道のより深き認識の手引となるだろう。
- 3 . 今の水道 現在の水道施設と系統について全体的な把握に到達する。
- 4 . 貯水池と浄水場 水道機能中の中枢的意義を認め、実地に見学して単なる観念的な学習に陥らぬ様に努めた。

四 . 中心点

東京市の水道について、「どんな順序で私達の家まで配水されるのか」というのがこの学習における児童の中心問題であった。

五 . 総合科目

修身 水道の意義・水道使用上の注意。国語 発表・文章表現・国語巻八(水)。理科 浄水装置・尋四理科書(水、血液循環系)。国史 昔の水道。地理 郷土誌。算術 鉄管口径・面積・体積・距離・濾過速度・各種グラフ表現。唱歌 作歌・作曲・タクト・ピアノ助奏。図画 説明画・写生画・ポスター等。手工 給水栓模型・鉄管口径切抜・発表物貼付作業等。遊戯 振付演出。

5. 合科・総合学習発表会

5 - 1. 合科・総合学習発表会の意義

山崎は、滝野川小学校での教育改革の初期の時代から学習成果の表現活動を重視してきた。その代表的なものが、先の校歴にもあげられた「学校劇」である。合科・総合学習においても、その表現の場である「発表会」が注目されている。山崎はこの「発表会」の意義を次の2点においてとらえている。

合科・総合学習と発表会の関係（注16）

合科・総合学習では、第一に題材を選定し、その題材のもつ意味の中心点を明らかにするのに必要な学科が決められる。したがって、必ずしも全学科にわたる必要はない。その意義は、全学級の児童とともに学習題材を選定し、構成する過程の中に存在する。そのとき発表会は単なる結果の表現に過ぎない。この点発表会を主目的としていた従来の学芸会とは立場を異にしている。あらゆる現象は幾多の諸条件が結びついて織り成されており、けっして単独ではありえない。それゆえ、合科・総合学習の形で、一つの題材を構成する基礎的諸条件を児童とともに検討しながら、しだいに高次の学習過程をたどるものである。こうして得た知識を単なる知識として記憶の片隅に放棄しておくことなく、共同的に表現へまで織り上げていく、ここに合科・総合学習の価値的重点がある。しかもその表現は、言葉による言い換えにとどまるものでなく、音楽に、絵画に、舞踊にまで、具体的に鮮明に表現しようとする。よりよく表現しようとする意欲にかられて、必然的に学習は深く、認識は正確になっていく。

自治的共同学習の陶冶（注17）

従来の学芸会はかぎられた有力の児童のみの活動に終り、他の児童はまったく無関係の観客の立場に置かれていた。題材の有機的学習を主張する合科・総合学習にあっては、全児童の参加を第一条件に置く。各個人は自分の個性と興味と学級における共同生活の立場等から、社会的分業の形をとって学習を発展させていく。一つの題材を、歴史的に、理科的に、数量的に、あるいは文学的、音楽的にそれぞれ理解と興味を深めていく。こうした多角的多様な学習形態は、決して一人の児童によって学び得られるものではない。多数の児童が分業的に学習し作業しながら、同時に題材の中心点に向かって互いに影響を及ぼしあって共同しつつ、学習の統一化、価値化をはかっていく。その過程で、個々の学習活動、ひとつの研究の歩みのたびに、学級に発表して批判を受け、それを契機としてさらに高次の学習の展開、そして次第に最後の総合的発表に歩んでいく、こうして自治的共同学習が成立する。こうした学習を通して児童の自主的、自覚的、社会的人格は陶冶される。

このように山崎にとって「発表会」は、個人あるいはグループの学習活動が吟味され、またそこから新たな学習過程が構成される場として、合科・総合学習の価値そのものに関わるものであり、さらには彼の新教育の目的の達成において中心的役割を果たすものである。これは、彼がその教育目的として社会(学級)成員相互の関係の教育に重点を置いた

ことから、その自然の帰結といえる。すなわち、相互交流の手段としての表現活動（発表）が重視され、それが組織化された発表会が注目されることになる。

5 - 2 . 合科・総合学習発表会の実際

実施方法

毎週月曜日第 1 時限を自習時間として特設しているから、それを利用する。このときの発表会は 15 分くらいを限度として行う。各学期 1 回全校の発表会を行う。このときは観衆は児童だけでなく、その父兄も加わる。

発表会の実際

先述した総合学習の実例「吾等の水道」がどのように発表されたか、みてみよう。（注 18）

なお、これは公開指導研究会における発表会でもある。

一．発表時間 約 20 分

二．発表児童 52 名（学級全員）

三．場面 2 場

第 1 場：便利な水道・昔の水道・今の水道

第 2 場：村山・山口貯水池と淀橋浄水場

四．実際の展開

第 1 場

始めの挨拶

便利な水道

井戸と水道（絵による発表）

便利な水道（文の発表）

私の家の水道（文の発表）

各種グラフ及びポスターの発表

昔の水道

今の水道

水源・配水順序・配水系統（絵による発表）

水道と血管（絵による発表）

水道の鉄管（絵による発表）

東京市水道の歌（唱歌と遊戯）

第 2 場

貯水池

村山貯水池（絵による発表）

山口貯水池（絵による発表）

多摩川本流流量より見たる貯水池の必要（絵による発表）

浄水場

新教育の実践家たち

淀橋浄水場平面図（絵による発表）

浄水装置図（絵による発表）

濾過池の構造図（絵による発表）

浄水場見学の文（文の発表）

終りの挨拶

なお、合科・総合学習発表会の題材としては、山崎の『新総合教育の実践』が出された当時2年間で、各学年で次のようなものが取り上げられている。（注19）

尋常科1年 身体検査、年の暮、町の乗物、ねずみ、動物園

2年 太郎さんの家、クリスマス、肉弾三勇士、時計、果物

3年 遠足、荒川放水路、お正月、郵便局、金物屋

4年 隅田川、水道、広瀬中佐、呉鳳、炭焼、

5年 青物市場、海国日本、水兵の母、四国地方を語る、芽生え、星

6年 参宮修学旅行、滝野川今昔物語、東北地方の凶作地、非常時日本の少女、縮尺物語、日露戦役

高等科1年 新校舎の屋上から、江戸から東京へ、冬枯、満州物語、近江聖人、マゼラン、エジプトの遺跡、鎌倉の今昔、日光と健康

2年 雪、雛祭、フレデリック大王、新進輸出品、伊藤博文、茶物語、米

山崎は発表会の取材範囲として、児童の生活（学校行事も含む）に依拠するもの、教科によるもの、郷土において求むもの、時局に取材するもの、その他によるもの（学会会用の既成作品）に分類しているが、これによると分科学習が中心となる尋常科4年以上では、広瀬中佐（修身）、水兵の母（読方）、縮尺物語（算術）、日光と健康（理科）、伊藤博文（国史）等、教科的なものが多く、他方低学年では、身体検査、クリスマス、遠足等、生活的なものが多数を占めており、各々の学習環境が反映したものとなっている。

おわりに

ちょうど、戦後の新教育の中心となった社会科教育が、社会における相互依存の関係を重視したのに対し、既成秩序、特に旧制度を温存したそれ、を無批判に受容すると批判されたように、山崎の「社会的人格」陶冶の教育も、たとえば、教育指針（国民的自覚、国民精神の涵養）が“教化”的な形で指導されたときなど、同様な問題を孕んでいる。

また、実際の学習においても、たとえば前掲の高等科1年の総合学習「満州物語」の授業報告をみると、成立まもない満州国を全面的に支持する形で学習が展開されている。児童の生活あるいは社会認識から学習をはじめるとき、かれらにとらえられない社会的規制・課題をどう扱うのか、問題となる。

さらに、教師も時代的制約を受けながら指導することになる。山崎の『新総合教育の実践』の序で、分科学習の先駆的な指導者であった奈良女高師の木下竹次は次のように記し

ている。「現下の状況について考えると、我が国民は漸く日本民族の建国の精神に徹底し、我が皇道精神を亜細亞大陸に恢弘し、遂には世界人類の平和を図らんとすることが願う切である。これについて為すべきことは夥多あるが、中でも、教育を以て日本民族大発展の基礎を確立することは大切である。」また、山崎自身も、同著の自序において、「総合学習の帰結は、言はずもがな日本精神にある。」と記している。こうした教師の姿勢は、たとえ“教化”的形をとらなくても、児童の生活環境の一部として、影響を及ぼすことになる。

このような問題を内包しながらも、その思想・実践は、わが国の教育における重要な遺産として受け継がれるべきものである。なぜなら、それらが、学習者の「生活の発展」を可能にする「全体知・具体知」の獲得という学校教育の根本的な課題をとらえ、それに答えようとしているからである。

(注)

1) 川下新次郎・1993・大正・昭和初期の公立小学校における新教育の実践・知られざる新教育・東京大学教育学部比較教育学研究室・pp.59-87、川下新次郎・1995・学校教育の世界・北区教育史(通史編)・北区教育委員会・pp.114-163。

2) 当時の新聞には次のように報道されている。

小学校が課目にして芝居を教へる 東京では滝野川校が皮切りで 新学期から毎日一幕づつ「こどもの生活は純真其のものです、偽らない凡ての表現は芸術そのものと言つていいでせう、大人は此芽生を良き方へ、導くことを忘れてはなりません、児童劇を教育に取入れようとする私共の試みが第一過程としての発表までに到達しました」(筆者注；大正13年2月16日に山崎が出した学校劇発表会の案内文) 市外滝野川尋常高等小学校では恰度一年前から教科用としての演劇の研究を始め、校長山崎菊次郎氏を始め長里、丸山、水上其他訓導達等生徒と一緒に熱心な研究を続けてゐたが、遂に或る程度までの成功を見たといふので二十日午前八時半から西ヶ原の活動写真館万歳館に生徒の父兄、教育家、研究家等を招き第一回の発表会を催すこととなった。(以下略) (大正13年2月18日付東京朝日新聞)

3) 山崎はこの時の状況を次のように記している。

「大体ジャーナリズムは私達の気持を、素直にとりあげてくれた。しかし、上司は必ずしもさうでなかつた。私は府庁によれば、近藤学校部長の前に屠所の羊のやうに引き立たされた。私は、学校劇に対する抱負と、実験上の自信とを披瀝して、教育の効果を力説した。府からの注意で、時の文相江木千之氏を訪問して、夢中で学校劇論をのべまくつた。無論両方とも、「聞きをく」で「追つて沙汰は致す」式で、底気味の悪い事は話にならない。全く此の時は、心静かに免職通知の日を待つた。」

山崎菊次郎・1935・私の自叙伝・新教育研究・第5巻第1号・p.88。

新教育の実践家たち

なお、同年江木文相のあとをうけた岡田良平文部大臣によって、「学校に於て脂粉を施し仮装を為して劇的動作を演ぜしめ、公衆の観覧に供するが如きは、質実剛健の民風を作興する途にあらざる」として、実質学校劇を禁止する訓令が出されることになる。

- 4) 若手教員 12 名で創設されたが、滝野川小学校では、水上健二、岡山光男、本田正信、桐谷四郎らが参加し、山崎は協会顧問の一人となる。機関紙『日本新教育』を昭和3年に創刊している。後に、学者や学校長などが中心になって昭和5年に創立された新教育協会（会長に野口援太郎、副会長に入沢宗寿、機関紙『新教育雑誌』）に吸収される。
- 5) 山崎菊次郎．1935．新総合教育の実践．文教書院．p.31．
- 6) 山崎前掲書．pp.10-13．
- 7) 山崎前掲書．pp.60-66．
- 8) 山崎前掲書．pp.68-78．
- 9) 山崎前掲書．pp.76-77．
- 10) 滝野川尋常高等小学校．1935．低学年合科学習指導課程．p.90．
- 11) 加藤八左衛門．1970．合科・総合教育断想．滝野川小学校．滝小八十年の歩み．p.24．
- 12) 新井つね．1935．歳末に於ける私の合科学習．新教育研究．第5巻第12号．pp.12-18．
- 13) 山崎前掲書．pp.82-85．
- 14) 山崎前掲書．p.93．
- 15) 飯田国男．1935．綜合学習 吾等の水道（尋四）．新教育研究．第5巻第5号．pp.80-81．
- 16) 山崎前掲書．pp.86-90．
- 17) 山崎前掲書．pp.90-92．
- 18) 飯田前掲書．pp.81-87．
- 19) 山崎前掲書．pp.118-119．

川下 新次郎

新教育の実践家たち 東京滝野川尋常高等小学校長 山崎菊次郎

川下 新次郎

(東京水産大学共通講座)

明治期に確立された近代国民教育制度の"教化"的性格を克服すべく、大正期に新教育運動が展開される。最初その試みは一部の私立校、官立校に限られていたが、やがて一般公立校にも広がっていく。山崎菊次郎校長の指導下、東京滝野川尋常高等小学校で行われた"新教育"は、児童の自発性、興味を活かしながら、それを社会性の陶冶に結びつけようとする点で、単なる児童中心主義によるものと異なっていた。その具体的学習活動の特色として、合科・総合学習、自治的共同学習、学習成果の公表などが挙げられるが、これらは、今日の学校教育においても注目されているものである。

キーワード：新教育、総合学習、自治的共同学習